

ブルガリアにおけるEU加盟後の羊の移牧の変貌

URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / ピーター, ペトロフ / 漆原,
和子 / PETROV, Peter

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

67

(発行年 / Year)

2008-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003578>

ブルガリアにおける EU 加盟後の羊の移牧の変貌

漆原 和子・ピーター ペトロフ*

要 旨

EU 加盟を 2007 年 1 月に果たしたブルガリアにおいて、羊の移牧の現状を調べ、持続的発展が可能かどうかの調査を行なった。その上で、既に 2003 年以来調査を進めているルーマニアの羊の移牧との対比を行なった。

この結果、ブルガリアのロドピ山脈においても羊の移牧の原型は二重移牧 (intermediate-stationed transhumance) であったが、国境が変化することにより、冬の宿営地であったギリシャのエーゲ海沿岸や、黒海沿岸の放牧地を失い、第二次バルカン戦争と第一次大戦後は垂直移牧 (ascending transhumance) のみを行なうことになった。また、第二次大戦後は社会主義化された大規模な移牧が行なわれていたことを聞き取りによって明らかにすることができた。社会主義体制下で、牧童は高級技術者として迎えられ、1,400～1,700m の準平原へ羊を連れていく“夏のキャンプ”が大規模に行なわれていた。社会主義体制下では、羊の頭数は現在の約 5 倍であり、草地は強いストレスを受けたと考えられる。しかし、1989 年以降の社会主義体制の崩壊によって、羊も牛も激減した。その結果、草地には灌木が侵入し、かつての広大な草地の大部分は現在は灌木林となっている。

ブルガリアでは EU 加盟によって小規模農家 (200 頭以下) が廃業する一方、羊の小規模農家 (200 頭以下) を EU の助成金によって新たに支援する方法もとられていることが明らかになった。ルーマニアでは、小規模農家 (200 頭以下) が廃業し、1,000～2,000 頭の大規模な移牧に移行し、EU の条件に沿うように努力している。移牧において社会主義化を徹底して行なったブルガリアと、ルーマニアの中で社会主義化を行なわなかった地域の移牧では、その後の発展に大きな違いがあることが明らかになってきた。いずれの国においても、移牧の持続的発展を続けていくためには、新しい方向を模索しなければならない時代に突入している。

キーワード：羊の垂直移牧，二重移牧，ロドピ山脈，EU 加盟

1. はじめに

本研究はルーマニアと同時期に社会主義化し、同時期に市場経済化し、同時期に EU 加盟を果たしたブルガリアの移牧の実態を明らかにしようとするものである。

ブルガリア共和国はバルカン半島東北部に位置

し、北はルーマニアに、西はセルビアとマケドニアに接し、南はギリシャとトルコに接する。ブルガリア共和国の北はドナウ川で限られ、東は黒海に面する。国の中央部にはドナウ川の南に東西に長軸をもつスタラ (Stara) (バルカン) 山脈があり、その南に平行してロドピ (Rodopi) 山脈が走る。ロドピ山脈の南は半乾燥の特色をもつ地中海性気候である。ブルガリアの複雑な国の位置図は、

* ブルガリア 科学アカデミー 地理研究所，研究員



Fig.1 ブルガリアの位置図

Fig.1に示した。

1909年にはブルガリア帝国として独立し、第一次バルカン戦争に勝利した。しかし、その後、マケドニアの領有をめぐるセルビア、ギリシャと対立した。1913年の第二次バルカン戦争の結果、マケドニアをセルビアに奪われ、ドブロジャ地方（黒海沿岸）をルーマニアに奪われた。第一次大戦後、エーゲ海沿岸を失った。第二次世界大戦のうち、1946年にはブルガリア人民共和国となった（今岡、1962）。1989年11月に社会主義体制は崩壊し、1990年にはブルガリア共和国と名称をかえた。1992年に初めて、選挙による大統領の選出を行ない、民主主義への移行を遂げた。2007年1月、ルーマニアとともにEU加盟を果たした。

ブルガリアは、ルーマニアと同様に古い山脈に残る複数の準平原面を利用して、羊の移牧が古くから行なわれていたところである。国境の変化、政治体制の変化をルーマニア同様に受けた国である。この政治体制の変化によって、近年の羊の移牧がどのように変化してきたかを知ることと、EU加盟によって、持続的発展が可能かどうか考察することをこの研究の目的とした。ルーマニアでは、羊の移牧を行っていた南カルパチア山脈の準平原面のある地域では、社会主義化を免れた。そこ

では、1989年以降の市場経済のもと、羊の頭数を増やし、近年土地荒廃が進んでいる（MORI et al.,2006, URUSHIBARA-YOSHINO et al.,2007）。1989年の革命後の、この両国の状況を比較することも、もう1つの研究目的である。

2. ブルガリアにおける羊の放牧

ブルガリアの西部を南北に走るピリン（Pirin）山脈や、ソフィアの南部にあり、東西に走るリラ（Rila）山脈においても羊の移牧が行なわれている。最高峰は約2,900mであるが、最も高い山頂部の草地は、今は放牧には利用していない。しかし、約1,800mと1,200～1,300mの準平原面は今も移牧に用いている。冬は干草を利用し、基地となる村で飼育する。夏の5ヶ月間、準平原の上で放牧する。ブルガリアの南部を東西に走るロドピ山脈は、古い岩質からなり、最高峰は約2,200mである。約1,400mと1,700mに準平原面が連なり、これを移牧に用いている。Fig.2にはルーマニアの地形がわかるように等高線を示した。今回の調査地はロドピ山脈の南麓を中心としたので、Fig.2にその調査地域を示した。第一次世界大戦前は、エーゲ海沿岸までブルガリアであったため、冬には基地とする山麓の村々から羊をエーゲ海沿岸まで移動させ、エーゲ海沿岸で冬を過ごさせた（PIMPIREVA, 1998）。当時ははるかに多くの羊を放牧していたという。また、後述のように89歳の年寄りには、ルーマニアから南下してきた牧童が、羊をつれてエーゲ海沿岸に向けてさらに南下したのを記憶している。ロドピ山脈からエーゲ海岸への移牧についてはCHANG（1999）やEFSTRATIOU（1999）も詳しく述べている。

第二次世界大戦後、社会主義体制のもとで羊の移牧も集団農場化された。牛・羊・ヤギや土地は全て共有化され、夏には基地となる村々から1,400～1,700mまで羊を移動させた。1つの集団農場は、50人以上の牧童がおり、大きな羊の畜舎（Photo.1）で人も羊も夏を過ごした。これを「夏のキャンプ」と称した。しかし1989年の社会主義体制の崩壊に

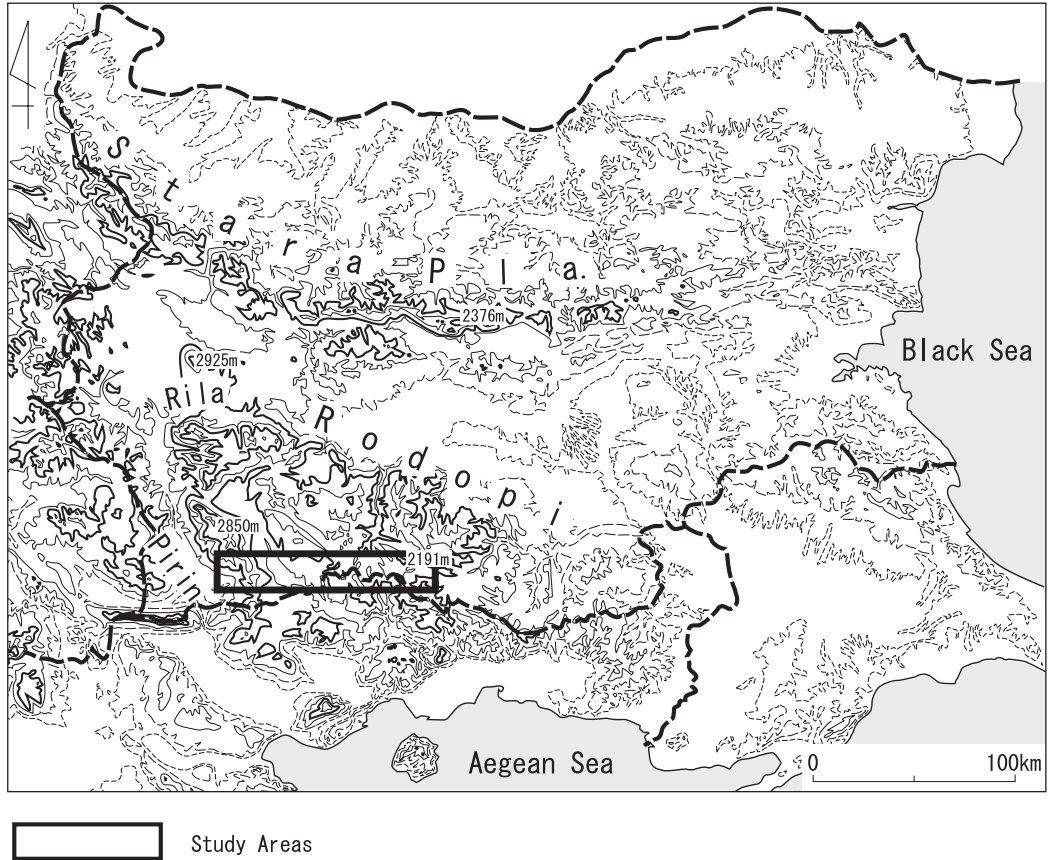


Fig.2 ブルガリアの山脈と調査地域



Photo.1 社会主義体制のもとで使用されていた夏のキャンプの羊の畜舎

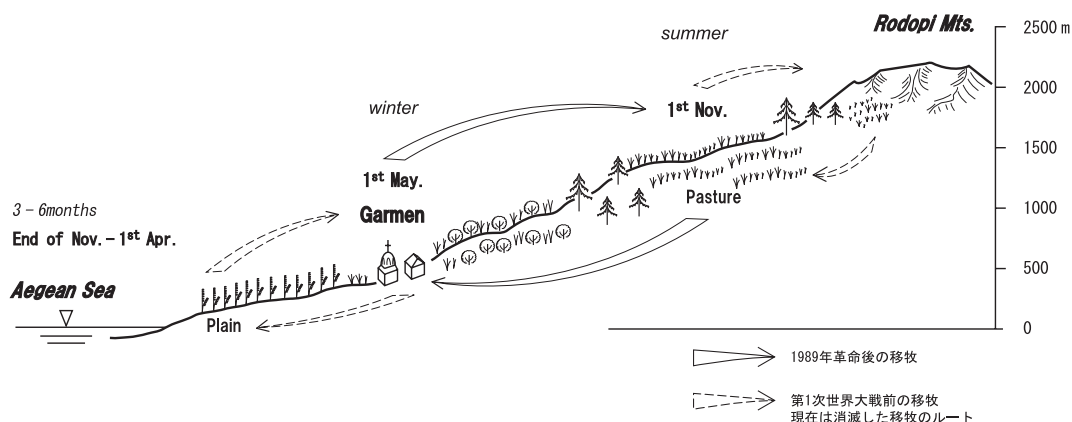


Fig.3 ロドピ山脈における羊の移牧



Photo.2 社会主義体制崩壊後の草地の灌木林化

よって集団農場は解体された。羊は社会主義化以前の各自の持分に応じて分けられ、農機具も含めて分配をした。羊の飼育の経験のない者は、羊をすぐ肉として売って現金に換えた。羊を飼育しようとする者は手放す人から購入した。しかし、大きな農家でも約 200 頭までであった。

ブルガリアにおいて行なわれた羊の移動様式の変化を Fig.3 に示した。第一次世界大戦前は基地

の村を中心として、高地と低地に移動する二重移牧 (Shirasaka, 2007) であった。その後の国境の変化により、エーゲ海沿岸や黒海沿岸の低地への垂直的な移動のルートが断たれ、高地への移動のみの、垂直移牧になった。また、社会主義化により、効率の悪い最高峰での移牧が行われなくなり、1,700m までの移牧となった。3 章以降で示すように、社会主義体制の崩壊によって、移牧をする羊

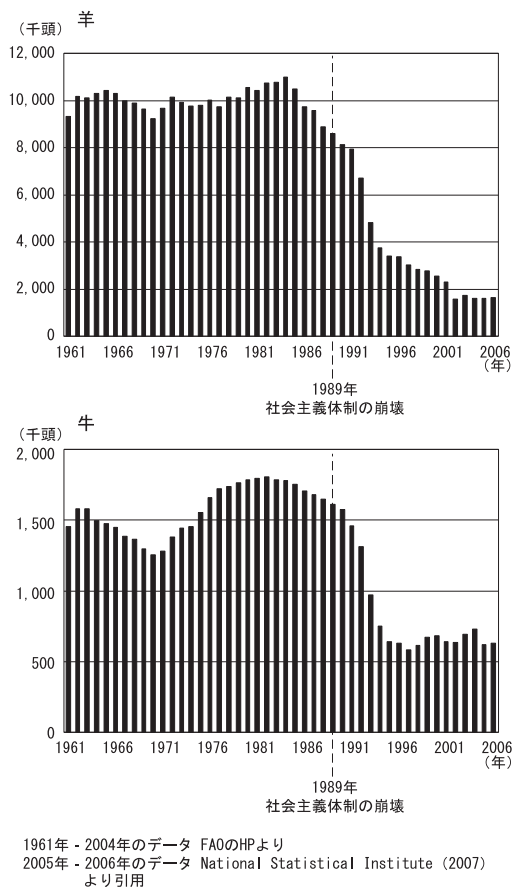


Fig.4 1961 - 2006年のブルガリアにおける羊と牛の頭数の変化

が激減していったため、現在では広い地域で草地の灌木林化が起きている (Photo.2)。

Fig.4には1961年から2006年までのブルガリアの羊の頭数と牛の頭数を示した。1961年から2004年まではFAOの統計により、2005年から2006年まではブルガリアのNational Statistical Institute (2007)の統計を用いた。これによると、社会主義体制のもとでは、羊も牛も極めて多く飼育されているにもかかわらず、1989年以降に激減した。社会主義体制崩壊後4年で、羊は社会主義体制時の1/5に、牛は1/3に減少したことがわかる。

ブルガリアのEU加盟は2007年1月に果たした。この時期はルーマニアと同じである。ブルガリアの畜産に対するEUの方針の主なもの以下

の通りである。

- i) 羊とヤギを主力とする。
- ii) カラカチャンスキー (羊の種) を保護する。
- iii) チーズの製造はマンドラ (工場) で行なう。

この条件を満たすため、マンドラまで各農家が羊の乳を運ばねばならなくなった。マンドラのハードルは高く、既EU加盟国と同様に冷蔵庫を備えた、衛生基準を満たすものでなければならない。この条件のうちii)は、ルーマニアには課せられていないブルガリア独自の条件である。

3. 移牧の現状

ロドピ山脈南麓の高度の異なる村々で、経営規模の異なる人々から聞き取りを行なった。以下の聞き取りから、羊の移牧の現状を明らかにしようと試みた。

(聞き取り例1)

イリア メリフ (Ilia Melif) 70歳 元高校教員。
Garmen村, 人口1,770人, 標高約545m

この村はロドピ山脈の南麓に位置する。南には平野が広がり、ギリシャとの国境をへてエーゲ海へ続く。平野ではタバコ、ポテト、麦の栽培をする。平野には部分的に草地が広がる。また、現在では丘陵地の草地は部分的にタバコ畑への転換も行なわれている。以下にメリフ氏からの聞き取り結果を示す。

Garmen村には、50年前は多くの羊や牧童がいて、社会主義体制下では羊の放牧も全て社会主義化していた。市場経済体制下では、家族単位で羊を飼い始めた。

〈第一次世界大戦前の状態について〉

カラカチャン (Karakachan) とは牧童を意味し、強い男で、黒い顔で目が大きい。Ilirian起源だとされている。牧童はウールのガウンを着ていた。このウールのガウンはヤムルク (Yamuruk) という。牧童はチョパン (Chopan) とも呼ぶ。

夏に野外で羊を集めて乳をしぼる (2回/日) 場所をエグレック (Egreg) とトルコ語で呼んだ。

コシャラ (Cošara) とブルガリア語では呼ぶ。

同じ村の人達が夏に高地へと移牧をした。村には大きな畜舎があった。冬に向けて 50～100km 動いて低地へ下りるタイプと、200～300km 動いてカラカチャンのそれぞれの家へ冬に移動するタイプと 2 通りあった。夏の牧草地の近くに家族を連れて行って住む人々もいたが、この人達は学校にも行かず、文字も書けなかった。男のみで馬で低地へ移動する人々もいた。ギリシャのエーゲ海沿岸へも行ったし、黒海沿岸に連れて行く場合もあった。その場合は、羊の 1 グループは 1,000 頭以上であった。現在でも羊の肉、ミルク、羊のチーズ (フェスタ)、ヤギのチーズなどをギリシャに売っている。

戦前、子供の頃に、カラカチャンが羊を連れて移動し、エーゲ海岸へ行くのを見たことがある。しかし、第二次バルカン戦争後、今日のような国境ができたことによって、この移動は終わった。

〈社会主義体制下での移牧〉

1955 年に社会主義化した時に、牧草を使う人々の組織を作っていた。5 月 1 日に羊を集め、山地へ連れて行って、11 月 1 日頃雪が降ると、羊を連れて下りた。夏を過ごす牧草地でのサマーキャンプでは、畜舎を建てて、乳からチーズを作った。

カラカチャンは誇りが高く、高い技術を有し、個性が強いので、社会主義体制化では高い給料で優遇された。55 歳で退職し、退職金も高かった。社会主義体制下でもカラカチャンは 300 頭中に 15 頭は自分の羊を持つことが許された。社会主義体制下では、牧童のことを“Operator na biologichiva edinitsa (動物専門技官)”と呼んでいた。

牧童達は家畜とともに移動して歩く、という性質を社会主義体制下でも変えられなかったのも、牧童用の特別な家を作って優遇した。

〈1989 年以降の移牧〉

1989 年、社会主義体制が崩壊し、その後の組織の再編成を行なった。ブルガリアの市場経済化はルーマニアのように大革命を伴わなかった。時間をかけて再編成を行なった。社会主義化する時に

各家族が供出した土地や、羊、牛、荷車にいたるまで、全て古い書類が残っていた。その書類に従って、羊、畜舎、牛、トラクターなどを分配した。しかし、今にいたるまで分配の仕方に不満を持つ人々がいる。かつての社会主義体制下で分配にあたった人々は、2007 年現在もまだ週に 3 回、裁判所に呼び出される。即ち、裁判は続行している。

EU 加盟後の羊の所有者たちは、今後の生産共同化を好んではない。個人所有を望んでいる。50～500 頭が普通の個人所有で、50 頭以上持っている、共有牧草地を無料で使うことができる。その際、登録料は支払わねばならない。無料で草刈り場にしている共有牧草地では、年 2 回草を刈る。その後は放牧をしてもよい。

この村には現在、約 800 頭の羊がいて、牧童は 7 人いる。隣の村は牛を 300 頭飼っている。牛は 40～50 ℓ/日、乳を出す。この村では、家畜に湧泉から良質の水を飲ませることができ、地中海性気候で植物の種の数が多く、ミネラルが多いため、肉質も非常にいいところと言われている。

〈聞き取り例 2〉

ズザルカ スミレノヴァ (Zdzarka Smilenova) 46 歳 (主婦)、夫 48 歳、息子 26 歳、妻 26 歳、孫息子 4 歳。標高約 1,030m。

今年、羊の農家をやめた。2007 年から、ペンション兼レストランに切り替えた。その理由は最も近いマンドラ (工場) でも 200km 離れていて、EU 加盟後その工場へ毎日ミルクを運ぶことができない。従ってやめざるを得なかった。

300 頭の雌羊と 4 頭の雄羊を所有し、100ha の草地をもって、牧童を雇っていた。羊毛は市場性がないので、無料で人にあげた。毎年子羊を 50 頭、肉用として売っていた。乳から自家製のチーズを作っていたが、これを工場に運ばねばならなくなった。90kg/1 日乳が取れた。1 日 80lev のお金になっていた。雪は約 80cm 積もるので、冬は羊を畜舎に入れた。従って、草地からは年 2 回刈り取って干草を作った。

社会主義体制の時 (1989 年以前)、この地方で



Photo.3 牧童ラミズ チャンタリエフ氏 標高約 1,000m の高地

は7月1日から10月1日までの3ヶ月間、サマーキャンプと称して羊を山地へ連れて行った。牧童として山の高いところ（1,700m 前後）へ行くのは男のみであった。

この村では社会主義体制時に比較すると、1989年市場経済体制に入ってから羊ははるかに減った。崩壊後は羊を受け取って養った人々もいるし、売ったり、肉にしたりした人々もいた。この主婦は、社会主義体制の崩壊後8頭の羊を受け取って、その後数を増やした。どの人々も社会主義体制から市場経済体制に変化したことに馴染んで、安定し始めたのは数年経ってからのように思う。

(聞き取り例3)

ストイアン ジャシェフ (Stoian Djadjev) 60歳
Garmen 村, ロドピ山脈南麓, 高度約 525m

平野から丘陵にかけてタバコ畑が広がる。シデとハイネズの灌木の交じる半乾燥地域である。社会主義時代は肉の専門家だった。豚・牛・羊の精肉を担当していた。社会主義体制が1989年に崩壊したのち、畜舎とトラクターを買った。このトラクターはソビエト製で今も健在である。果物・野菜・牧草作りをして、良い肉を作りたいと思い、

崩壊3年後にここを購入した。社会主義体制下で、化学物質や窒素を肉に直接入れた。今は自分で放牧した鶏の肉を生産し、自分でも食べたいと思う化学物質を使わない安全な肉を販売している。安全なラム肉も契約をし、ネットワークを使って売っている。年間120tを取り扱っている。輸出のためには大量生産が必要であり、生産が間に合わないの、輸出はやっていない。肉牛40頭と乳牛は36頭いる。父から古い時代にワラキア人が次第に南下し、羊の移牧をしながらブルガリアまで来たと聞いている。この農園の労働者は、60人である。リンゴ園は家畜の糞でまかなっていて、わずかな殺虫剤のみでとても良く育つ。趣味はブルガリア民謡を歌うことで、時々歌手としてTVに出ることが生きがいである。

(聞き取り例4)

ラミズ チャンタリエフ (Ramiz Chantaliev) 77歳
Cochan 村, 約 980 - 1,025m の石灰岩の台地

10歳から牧童として働いている。今は50頭で、もう少し増やそうと思っている。かつては、この台地に夏のみ上ってきていたが、今は村へ帰らず、冬もここで過ごしている。50年間過ごした牧草地

である。Photo.3に2007年9月、羊を放牧中のチャントリエフ氏を示した。

妻が亡くなるまでは、冬、村に帰っていた。しかし、妻が亡くなってからやめて、一旦村で暮らしたが、私には馴染まないの、またここに戻ってきた。以前は500頭の羊を飼っていた。ギリシャとマケドニアの市場へトラックで5時間かけて羊を売りに行っていた。今はここへ買いに来るので、10-15頭を毎年売っている。マケドニアやセルビアから雌牛を買って新しい血を入れる。毎年雄羊2頭を変え、年を取った羊を売って、若羊はできるだけ手元に置く。14歳で共産党員になって、移牧に携わった。社会主義体制下では、50人の牧童がいて、5人のリーダーがいた。36,000頭の羊を扱った。村の人口は3,000~4,000人であった。羊の群のリーダーは、賢くて性格の良い羊を選ぶ。これをミウカ (Milka) と呼ぶ。首には鈴を付ける。ルーマニアではフルンタツァ (frunța) と呼び、大抵は雌羊である。

(聞き取り例5)

アセン コカラロフ (Asen Kokalarov) 89歳 かつては牧童だったが、今は隠居生活。

Buinovo村、人口400人、約100家族、標高約1,370m

ギリシャとルーマニアにはカラカチャン (牧童) がいた。この村は彼らが移動する際の一時的基地であった。当時は1カラカチャンは最低でも300頭以上をあつかっていたと父から聞いたことがある。この高原の位置は、局地的には台地状になっていて、さらに高地にも牧草地がある。また、さらに低地にも牧草地があるので、移動のための位置に好都合である。ここへ来たカラカチャンは、羊を何かに変えるために村に寄り、2~3日滞在し、必要な情報を得ていたのを子供の頃に見ている。

山の羊は、羊毛が固くて強かったので、糸にして、ズボン、セーター、家具の布など何でも作った。戦前は全ての洋服は羊毛から作った。また、皮からも種々のものを作った。羊の皮を肉からは

がし、きれいにするのは男の仕事だった。父はマーケットで皮を売った。第二次大戦より前は、たくさん羊がいて、10~15歳くらいの自分が父を助けて羊を飼っていた。当時はどの家も50~60頭は飼っていて、500頭以上の家もあった。今はこの村では200頭以上の家族が15ある。放牧地をどう使用するかの技術が、最も大事であるが、多くの羊を持っている人の言うことを貧しい人々は聞かねばならなかった。

羊のチーズやバターは家で作った。多くできたときは工場に持っていった。バターは70%は工場に売って、30%は家族用としていた。今はすべて工場で作らねばならない。畜舎は、干草の収納小屋も兼ねるが、これをサイバン (Saivant)、またはPlevnai o borという。また、牧草を刈る鎌はコスィロ (Cosilo) と言い、刃の部分はコシャ (Coša) という。Photo.4に草刈りを実演してみせ、鎌の使用法を示すコカラロフ氏を示した。常に研いでシャープにしておく必要があり、砥石を常に持ち歩く。長男は既に60歳である。息子は2人、娘は4人である。



Photo.4 草刈り鎌 (コスィロ) を用いての草刈りの実演をする牧童アセン コカラロフ氏

(聞き取り例6)

ミトコ ククンジェフ (Mitko Kukungeiv) 41歳、妻35歳、息子5歳。

Jagodina村、人口700人、273家族。標高約1,130m

2007年2月にEU助成金に応募して、羊の牧童

のための補助金を獲得した。87人の応募者のうち、1人のみ補助金を得ることができた。

2007年4月に、1頭190levを120頭購入した。3頭の雄羊も買った。1頭の牧羊犬を300levで買った。カラカチャン1人に毎月450lev支払っている。羊の乳はヨーグルトとチーズにして村のホテルへ売る。村へは牧草地の使用料を年に1,000lev支払う。この金額は、1haあたり13頭として算出する。1,100mの高地に畜舎を建て、水を引き、電気をつけた。50m×20mの畜舎で1,000頭の羊を飼育できる。年中ここで飼う事にした。草は機械で刈って干草をつくる。5haは冬の飼料確保のために使用し、干草は畜舎へ保存する。

この補助金を得る前に雌羊7～8頭を持っていた。父母は移牧の経験はない。祖父は1年間1,500～1,600mの高地にいて牧童をやっていた。その当時は電気はなく、水のみがある小屋であった。羊の牧童の経験と技術を消したくないので、この技術を継承し、今後も羊の数を増やして行きたいと考えている。今後は工場を作って、母とともにヨーグルトを作りたい。ヨーグルトは近くのホテルへ売る。ミルクをムレコ (Mureko)、フレッシュチーズはシレーネ (Cierene) という。

この補助金を得るとき、ソフィアから21人のEUの役人が審査にきた。その後も月に1度、5～6人の査察官がやってきて、毎月羊の飼育状況を追跡されている。

4. まとめ

2007年9月、EU加盟後のロドピ山脈南麓の調査によって、羊の移牧の実態を明らかにした。その結果、ルーマニアとの違いが明らかになった。以下にまとめて、それを示した。

- 1) 社会主義体制下では、準平原面上の羊の移牧が「夏のキャンプ」と称して、非常に密度の高い状態で放牧されていた。羊の頭数は、今日の約5倍であった。
- 2) 第二次バルカン戦争前は、冬の羊の移動は遠く黒海沿岸やエーゲ海沿岸までおよんでいた。

また、山脈の山頂部付近の植生限界付近の草地も移牧の対象とされていた。この二重移牧の様式は、国境の変化とともに消滅し、今日のように垂直移牧のみに変わった。即ち、ブルガリアにおいても移牧の原型はルーマニアのカルパチア山地にみられる二重移牧と同じであった。

- 3) 1,400～1,700mの準平原面上の草地にも、500～600mの山麓の丘陵地にも、樹木が侵入し、かつての牧草地が今日では灌木林に覆われている。こうした景観の地域が増加している。社会主義体制崩壊後、羊の頭数の減少によって、土地荒廃よりむしろ植生の回復が起こっている。
- 4) EU加盟後、200～300頭の羊を有する農家はチーズやヨーグルト作りに励む場合もあるが、廃業に追い込まれる場合もある。また、200頭以下の農家にEUの補助金でチーズやヨーグルトの製造を促している場合もある。

以上に見るように、ルーマニアの羊の移牧に対するEUの方針とブルガリアのそれは、かなり大きな違いがある。即ち、ブルガリアでは、羊の小規模農家を育成する方向であることがわかった。

謝辞

本研究は平成19年度科学研究費補助金、基盤研究B、課題番号19401003、「社会体制の変革に伴う移牧の変貌と土地荒廃」(代表者 吉野和子)によって行なった。本論文に記述した聞き取りをさせていただいた方々の他に、現地で、牧童がいるであろう高地の放牧地まで案内いただいたり、現地での諸事情を語っていただいた多くの方々がおられた。ブルガリアの現地での好意的協力のもと短期間のうちに現状把握ができたことを記して感謝いたします。また、この野外調査はブルガリア科学アカデミー、地理研究所の全面的な協力があって実行し得たものであり、ブルガリアの人々の親切に重ねて感謝します。また、亜細亜大学松前もゆる氏にはブルガリアでの事情を御教示いただき、調査がスムーズに行なわれた事を感謝します。

参考文献

- CHANG, C. (1999): The ethnoarchaeology of pastoral sites in the Grevena Region of Northern Greece. in "TRANSHUMANT PASTRALISM IN SOUTHERN EUROPE. Recent Perspectives from Archaeology History and Ethnology." eds. by L. BARTOSIEWICZ and H.J.GREENFIELD. 245p., 133-144.
- EFSTRATIOU, N. (1999): Pastoralism in highland Rhodope: Archaeological implications from recent observations. in "TRANSHUMANT PASTRALISM IN SOUTHERN EUROPE. Recent Perspectives from Archaeology History and Ethnology." eds. by L. BARTOSIEWICZ and H.J.GREENFIELD. 245p., 145-158.
- FAO HP : <http://faostat.fao.org/>
- 今岡十一郎 (1962) : ブルガリア. 新紀元社, 482p.
- MORI, K., URUSHIBARA-YOSHINO, K., et.al. (2006): Primary Cause of Water Pollution in the Headwaters of River Cibin, Central Romania, with Special Reference to Sheep Overgrazing. *Physical Geography, U.S.A.*, 27(4), 308-315.
- National Statistical Institute (2007): Statistical Reference Book of the Republic of Bulgaria 2007. National Statistical Institute, 195p.
- PIMPIREVA, Zh. (1998): Karakachans in Bulgaria. IMIR, Sofia, 219p.
- SHIRASAKA, S. (2007): The Transhumance of Sheep in the Southern Carpathians Mts., Romania. *Geographical Review of Japan*, 80(5), 94-115.
- URUSHIBARA-YOSHINO, K., MORI, K. (2007): Degradation of Geoecological and Hydrological Conditions due to Grazing in South Carpathian Mountains under the Influence of Changing Social Structure in Romania. *Geographical Review of Japan*, 80(5), 76-93.

Change of Sheep Transhumance in Bulgaria since Joining the EU

URUSHIBARA-YOSHINO Kazuko and PETROV Peter*

Abstract

In order to study the possibility of sustainable development of sheep transhumance in Bulgaria since joining the EU in January 2007, an attempt is made to compare with the results of the previous studies since the year 2003.

It was clarified that: (i) the intermediate-stationed transhumance of sheep has been seen also in Bulgaria as an original type, and (ii) due to the change of border, ascending transhumance has been found only after World War I in the Aegean Sea coastal area of Greece and in the coastal area of Black Sea, Romania, where the winter stations were settled.

These results were obtained based on interviews with people on the large scale transhumance under the socialistic conditions. Among them, the following interesting points are noted: (i) Shepherd warmly received as high standard technologists, who moved sheep to the peneplains at 1,400–1,700m a.s.l. for the summer camps. (ii) Number of sheep under the socialist regime was about five times more than present and this might have resulted in strong stress for the grass land. (iii) Numbers of sheep and cow decreased sharply after the collapse of the socialist regime in 1989, and as a result, bush invaded to the grass land developing the bush forests in the broad former grass land. Small scale farmers holding fewer than 200 heads of sheep in Bulgaria have been closing their business after joining the EU. On the other hand, there is a policy that they are supported by the subsidy from the EU.

In Romania, the small scale farmers keeping fewer than 200 heads of sheep have closed and, instead, the large scale sheep transhumance with 1,000–2,000 heads is developing for the sake of fitting to the hard conditions after joining with the EU, which intends to establish modernized industry. It is worth pointing out that there is a difference between Bulgaria, which took a stringent policy for transhumance under the socialist regime, and Romania, which did not do so. The sheep number of transhumance has increased 10 times after the collapse of the socialist regime in Romania. Land degradation has progressed also after EU Membership.

It is thought that both countries should find own way for sustainable development of sheep transhumance.

Keywords: ascending transhumance of sheep, intermediate-stationed transhumance, Rodopi Mountains, EU member

* Institute of Geography, Bulgarian Academy of Sciences.